

# 三反地遺跡発掘調査概報

—県道羽方豊中線道路改修工事に伴う発掘調査—

1990年3月

香川県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は県道羽方豊中線改修工事に伴って実施した三反地遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査期間は平成元年10月30日から11月7日までの実働6.5日間である。
4. 現地調査は香川県教育委員会事務局文化行政課技師　國木健司が担当した。
5. 採図の一部に建設省国土地理院発5万分の1地形図「仁尾」・「観音寺」・「池田」・「丸龜」を使用した。
6. 本文の執筆・編集は國木が担当した。

## 目 次

|                         |   |
|-------------------------|---|
| 第1章 調査に至る経過と調査の経過 ..... | 1 |
| 第2章 立地と環境 .....         | 2 |
| 第3章 調査の結果 .....         | 4 |
| 第4章 まとめ .....           | 9 |

## 挿 図 目 次

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 第1図 周辺の遺跡 .....          | 3   |
| 第2図 調査区配置図 .....         | 4   |
| 第3図 2区平面図及び土層断面図 .....   | 5~6 |
| 第4図 4・5区平面図及び土層断面図 ..... | 8   |
| 第5図 遺物実測図 .....          | 9   |

## 図 版 目 次

|                               |                         |
|-------------------------------|-------------------------|
| 図版 1 2区調査風景<br>2区遺構検出状況       | 図版 4 4区完掘状況<br>5区完掘状況全景 |
| 図版 2 2区完掘状況<br>3-W区SD01       | 図版 5 5区検出遺構<br>5区出土遺物   |
| 図版 3 3-E区遺構検出状況<br>3-E区遺構完掘状況 |                         |

## 第1章 調査に至る経過と調査の経過

県道羽方豊中線道路改修工事は、三豊郡高瀬町羽方を東西方向に横断する幅約4mの現道を約8mに拡幅する事業である。

事業は、幸の神地区における第Ⅰ期工事（平成元年4月～7月）及び三反地地区における第Ⅱ期工事（同年9月～同2年2月）に分けられ、地元の強い要望から今年度中の完成が予定されている。この事業計画については、平成元年3月15日付63教文発第416号で県教育委員会事務局文化行政課から県土木部道路課長あてに行った照会に対し、平成元年4月10日付元道B第11号で寄せられた回答により把握された。文化行政課では該当工事のうちⅡ期工事予定地が周辺の埋蔵文化財包蔵地である三反地遺跡に隣接しているが、小規模な事業でもあったことから、工事実施中に立会調査を実施することで調整がまとまっていた。

しかしながら、平成元年4月26日に第Ⅰ期工事である幸ノ神地区において、掘削工事実施中に須恵器片が出土し、元觀土発第500号で觀音寺土木事務所長から遺跡発見通知が提出されたことから、県教育委員会は同年5月11日、16日の両日現地視察及び工事立会を行った。その結果、7世紀代の須恵器を包蔵する包含層が認められ、三反地遺跡が予想以上に広範囲に広がることが確認された。Ⅰ期工事分については既に掘削工事が終了していたため、断面観察による記録化のみを行うに留まったが、Ⅱ期工事分については、道路交差点でもありやや拡幅規模が大きかったため、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。

第Ⅱ期工事分の発掘調査に至る文書処理は以下のとおりである。

平成元年9月27日付元道B第320号 …………… 文化財保護法第57条の3条1項による埋蔵文化財発掘の通知（香川県知事より文化庁長官あて）を高瀬町教育委員会に提出。

平成元年9月28日付高瀬教委発第59号 …………… 高瀬町教育委員会より県教育委員会教育長あて、上記通知を進達。

平成元年10月6日付元教文発第15—12号 ……… 文化庁長官の指導により、県教育委員会教育長より県知事あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知。

平成元年10月23日付元教文発第30—42号 ……… 文化財保護法第98条の2第1項に基づく発掘調査について、県教育委員会教育長より文化庁長官あてに通知。

発掘調査は県教育委員会が主体となり、平成元年10月30日より11月7日まで実働6.5日間で月実施した。調査対象地は5区に細分して調査を行ったが、重機使用が可能な1～3区については重機により遺構面まで掘り下げ、遺構面精査及び遺構発掘のみ人力で行った。4・5区については幅狭な調査区であったため、全て人力による発掘を行った。11月7日、全調査区の埋戻しを完了し、調査を終了した。

## 第2章 立地と環境

高瀬町は香川県の西端、三豊郡の北部丘陵地帯に位置する。面積約 56.29 km<sup>2</sup> の町である。東西方向に細長い菱形を呈する町で、中央部以西に北流する高瀬川流域の沖積平野が広がり、町東部は朝日山、傾山をはじめとする独立丘陵及び、大麻山、象頭山等の山地帯が占めている。

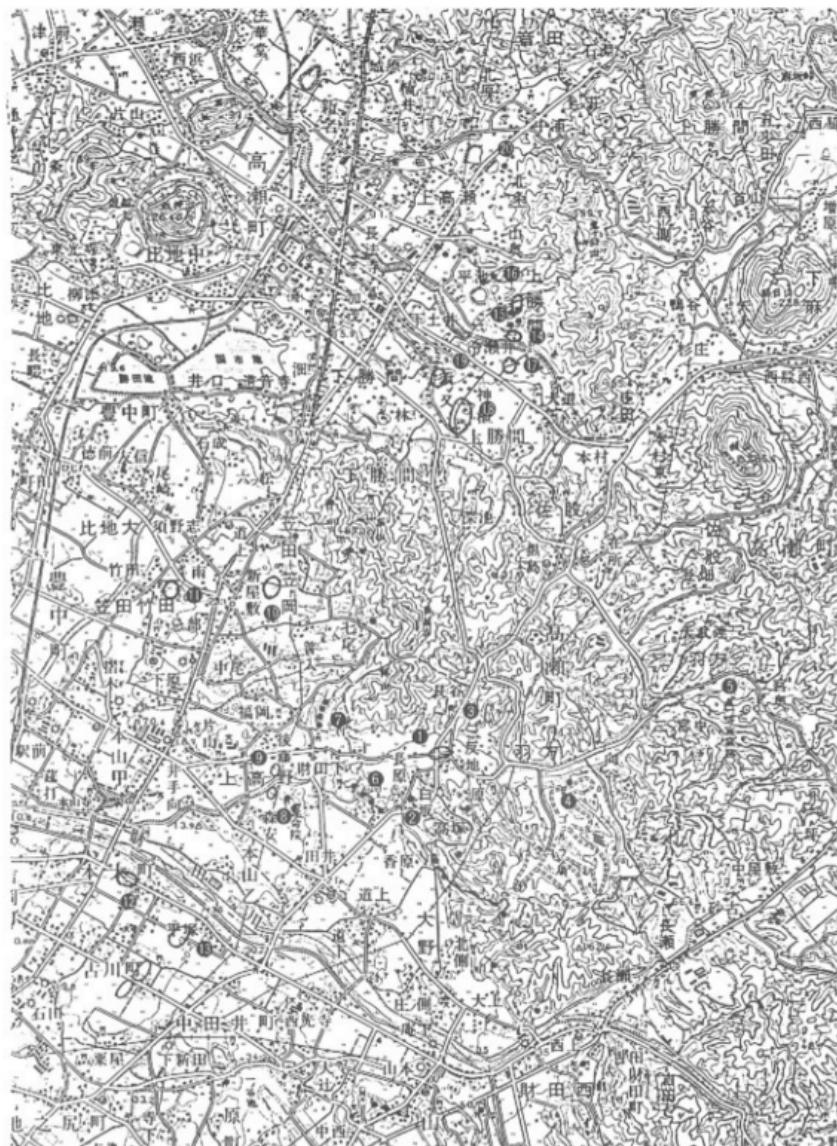
町内の遺跡分布は大半が高瀬川流域の平野部及びその周辺の丘陵地帯に立地しており、町東・南部の山間丘陵地帯は極めて希薄となっている。高瀬川流域の集落遺跡としては、中流域東岸の丘陵部に位置する弥生時代中期後半～後期前半の利生寺遺跡、両岸の自然堤防上に立地する大門遺跡、矢の岡遺跡等が知られている。周囲の丘陵部には4世紀後半代の矢の岡石棺群のほか利生寺古墳、砂古古墳、三背鼻古墳等の後期古墳が散在して分布する。また、流域東側の高瀬町から三野町にかけての山間部には大平窯、道免2号窯、末古窯址群をはじめとする窯跡が多数所在している。

三反地遺跡は町南部の山間部を縫うように西流する宮川中流域の盆地状に開けた平野部に位置する。同川は広大な三豊平野北部を流れる財田川へと流入するため、三反地遺跡の歴史的環境を考える上では、むしろ豊中町及び観音寺市内の宮川、財田川流域の諸遺跡との関連を重視すべきであると思われる。宮川上流域には、銅劍、銅鐸が出土した向谷遺跡、平安後期～鎌倉時代にかけての瓦窯跡である二の宮窯跡等が所在している。三反地遺跡が所在する盆地周辺の丘陵部には、川北1号墳、高塚1号墳のほか、高沢古墳群、財田古墳群、延命古墳群といった小規模な群古墳が所在している。

財田川流域には繩文時代後期～弥生時代前期の樋の口遺跡をはじめ一の谷遺跡群(平塚地区)、石ノ経遺跡等流域南岸の自然堤防上に弥生時代の集落遺跡が所在する。また、流域以北の豊中町内には宮脇遺跡、竹田遺跡等古代から中世にかけての集落遺跡が所在しており、三反地遺跡との関係が注目される。

|         |         |           |          |
|---------|---------|-----------|----------|
| 1.三反地遺跡 | 6.高沢古墳群 | 11.竹田遺跡   | 16.利生寺遺跡 |
| 2.白坂古墳群 | 7.財田古墳群 | 12.樋の口遺跡  | 17.矢の岡遺跡 |
| 3.川北古墳  | 8.延命古墳  | 13.一の谷遺跡  | 18.神の植遺跡 |
| 4.向谷遺跡  | 9.延命遺跡  | 14.大門遺跡   | 19.須ノ又遺跡 |
| 5.二の宮窯跡 | 10.宮脇遺跡 | 15.利生寺古墳群 | 20.北条遺跡  |

第1表 周辺の遺跡一覧



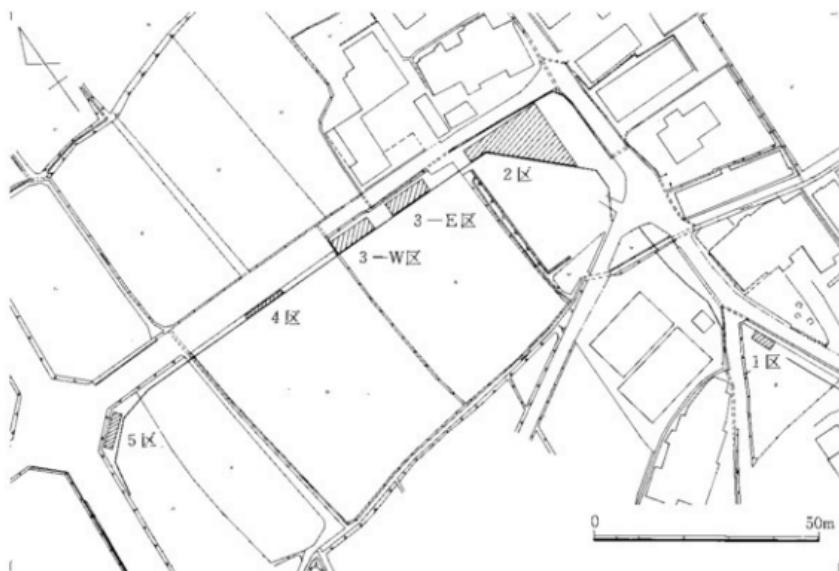
第1図 周辺の遺跡

## 第3章 調査の結果

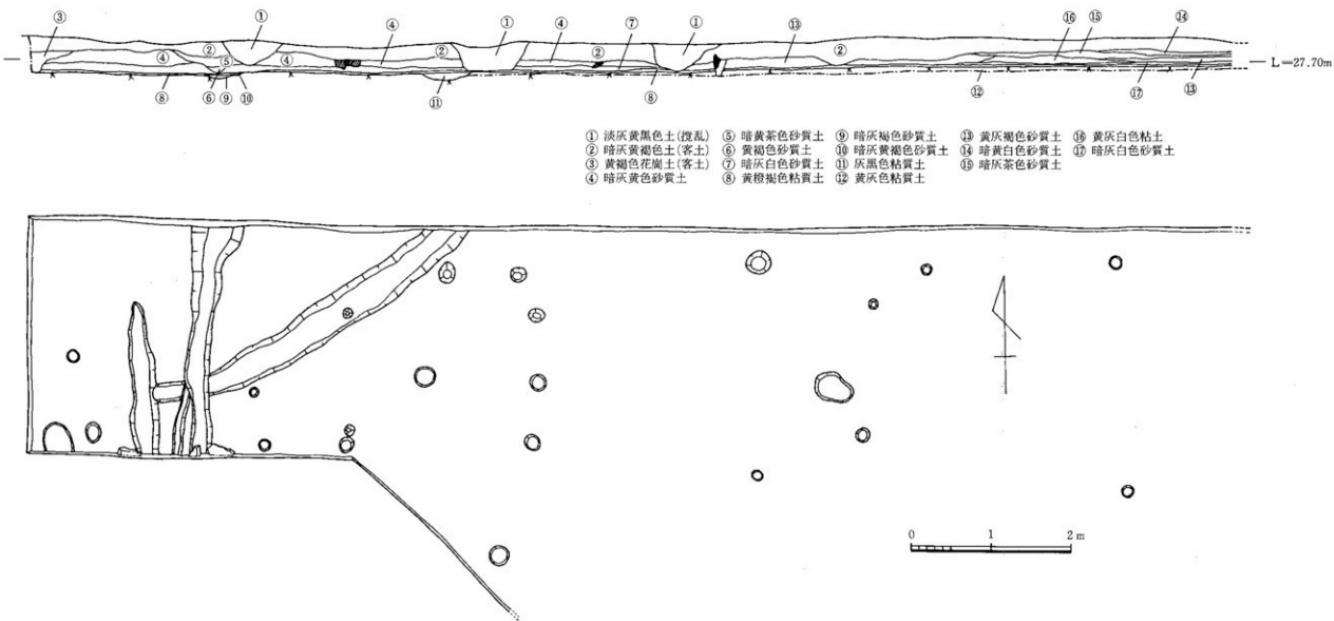
### 1. 調査区の設定

工事が現道拡幅のため、調査対象地も現有構築物及び現行地割に制約されるものとなった。調査区は現行地割によって5区に区分したが、2区を除きトレンチ調査的なものとならざるを得なかった。

1区は5m×2mの調査区で、調査面積は10m<sup>2</sup>である。2区は当初20m×5mのトレンチ調査的な調査区を設定したが、その北東端付近でピット等の遺構を検出したため、工事予定地境界まで調査区を拡張した。調査面積は160m<sup>2</sup>である。3区は3m×10mの調査区を2カ所設定し、各々E区、W区とした。調査面積は60m<sup>2</sup>である。4区は10m<sup>2</sup>(10m×1m)、5区は16m<sup>2</sup>(8m×2m)の調査区であり、総調査面積は256m<sup>2</sup>である。



第2図 調査区配置図



第3図 2区平面図及び土層断面図

## 2. 基本層序

1～3区及び5区については耕作土直下に厚さ10～20cmの灰色系粘質土の堆積が確認されるが、いずれも遺物は極めて希薄であり、2区で石鎚1点を検出した他は土師器細片が数点出土したに留まる。また、2区については旧宅地であったこともあり、地山に至るまで搅乱が著しかった。また、4区については床土直下が地山層に至り、包含層の形成はなかった。なお、地山層は1・2トレは黄灰色粘質土、3～5トレは暗黄褐色砂質土層であり、2・3区を境に地山層に相違が認められる。

## 3. 検出遺構・遺物

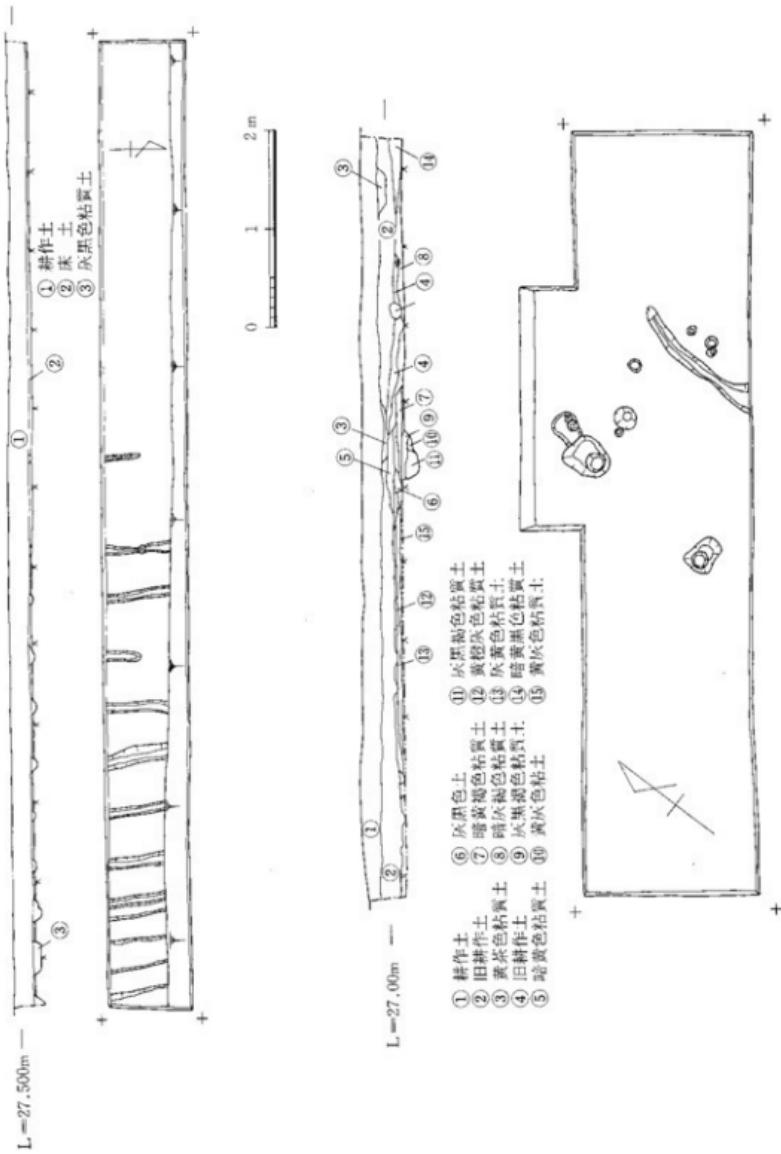
1区では遺構は検出されなかった。2区では調査区中央以南では遺構は検出されなかつたが、北辺付近でビット群、溝状遺構4条、及び焼土面等を検出した。S D01は幅20～50cm、深さ10cm前後をはかるU字溝で、埋土は灰黒色粘質土である。溝中から須恵器斐片、土師器片等が少量出土しているが、埋土が5区で瓦器、土師器の出土をみたビット群と同様であることから、鎌倉時代後半期の所産と考えられる。その他の溝状遺構は、S D01を切ることから後出のものと考えられるが、出土遺物が皆無のため時期は不明である。遺構面直上の包含層中から石鎚が1点のみ出土している。

3区ではE区で小ビット群及び小溝状遺構1条を、W区では西端付近で溝状遺構（S D05）1条を検出した。S D05は幅50～60cm、深さ30cm前後をはかり、埋土は概ね灰黒色系粘質土である。出土遺物は土師器細片1片のみであったが、埋土の状況からみて、S D01とほぼ同時期の所産と思われる。

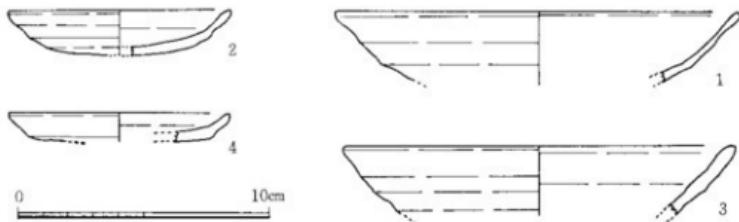
4区は床土直下（地山面）より小溝状遺構群を検出した。検出数は11条であり、ほぼ等間隔に構築されている。東ほどその深さ、幅ともに大きくなるがいずれからも出土遺物は皆無であった。用途、時期ともに不明である。

5区からは包含層直下の地山面からビット群及び小溝状遺構を検出した。いずれの埋土も灰黒色粘質土であり、S P01、02からは集中的に土師器、瓦器等の遺物の出土をみた。

瓦器は楕及び小皿が出土している。楕(1)は口縁部のみであるが、ヘラミガキは内外面ともに認められない。(2)の小皿は底部糸切りで、復元口径8.9cmをはかる。外面に粗いヘラミガキが認められるほか、内底面には扇形に連続する凹面がみられる。(3)は土師器杯で復元口径約15.5cmをはかる。(4)はS P01周縁部の遺構面直上より出土した土師器小皿で、底部に糸切りの痕跡が残る。



第4図 4・5区平面図及び土層町面図



第5図 遺物実測図

## 第4章 まとめ

今回の発掘調査は短期間の小規模調査であったため、遺跡の内容について断片的な知見を得たのみである。また、時間的制約から充分な遺物の検討も行い得ていない。しかしながら、これまで県教育委員会等が常備する遺跡台帳においても三反地遺跡の内容等については不明瞭な部分が多くあった中にあって、遺跡の年代観について若干とはいえ知り得るところとなつた点は今回の調査の最大の成果である。そこで、ここでは遺跡のおおまかな年代観と範囲、内容等にふれながらまとめとしておきたい。

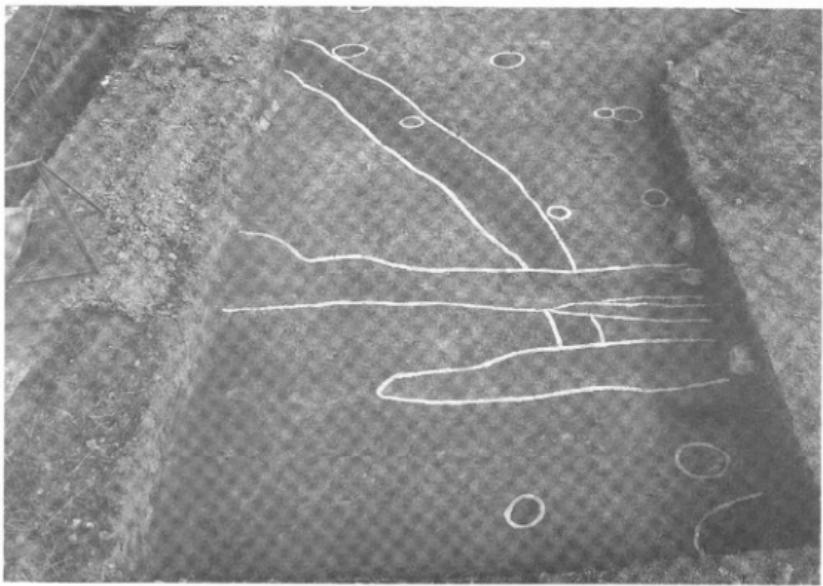
各遺構の年代を推定しうる遺跡は5トレスのピット内、及び遺構面直上より出土した土師器、瓦器のみである。瓦器は器高の縮小、ミガキ調整の簡略化が顕著であり、また小皿については内底面の扇形に連続する凹みに特徴がある。これらの特徴からすれば、概ね13世紀後半と推定される。また、2区、3区で検出した遺構のうち、SD01、SD02及び2区のピット群の埋土が、5区で検出したSP01、02等とほぼ同一であったことからすれば、これら他地区の各遺構も同時期の所産である可能性が高い。

その他、今回の発掘調査では2区より須恵器片、石鎚等の出土をみている。今回の調査区南方の低丘陵縁辺部に位置する幸の神地区においても第Ⅰ期工事の際に須恵器片を含む包含層を確認しており、この低丘陵上に弥生時代及び古墳時代終末期～奈良時代の集落が所在する可能性は高い。

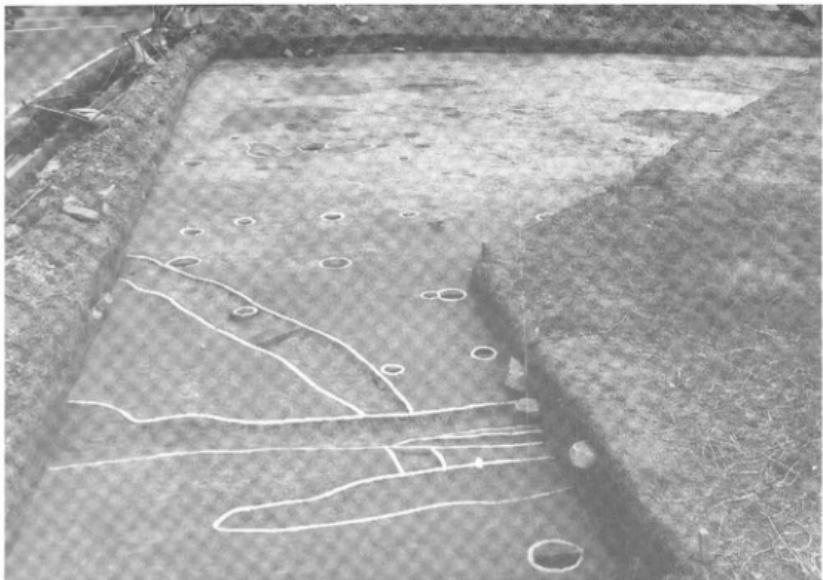
今回集落の全体像は把握できていないものの、三反地遺跡が鎌倉時代後半期を中心とする集落遺跡であり、付近に所在する二の宮塗跡が当該期を中心とした年代が与えられていることからすれば、両遺跡に何らかの関係があったことも予想され、今回の周辺地域の調査が期待される。



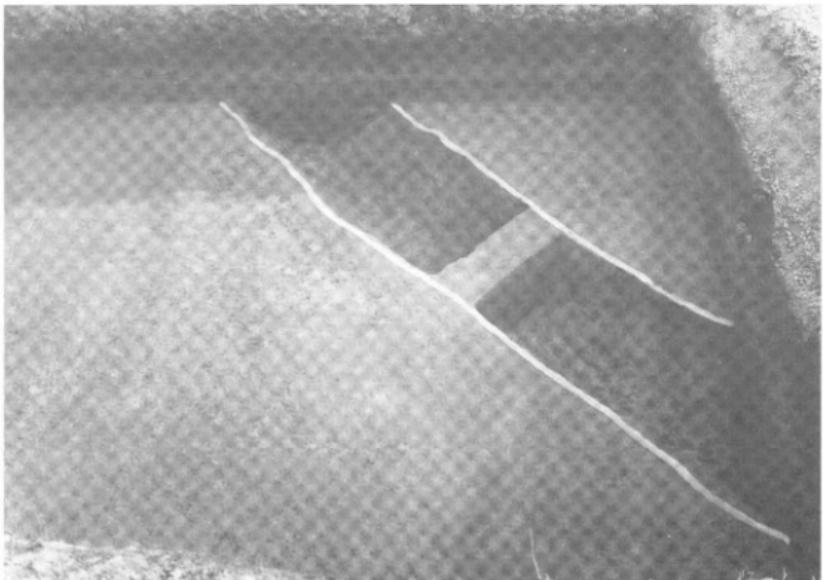
2区調査風景



2区遺構検出状況



2区完掘状況



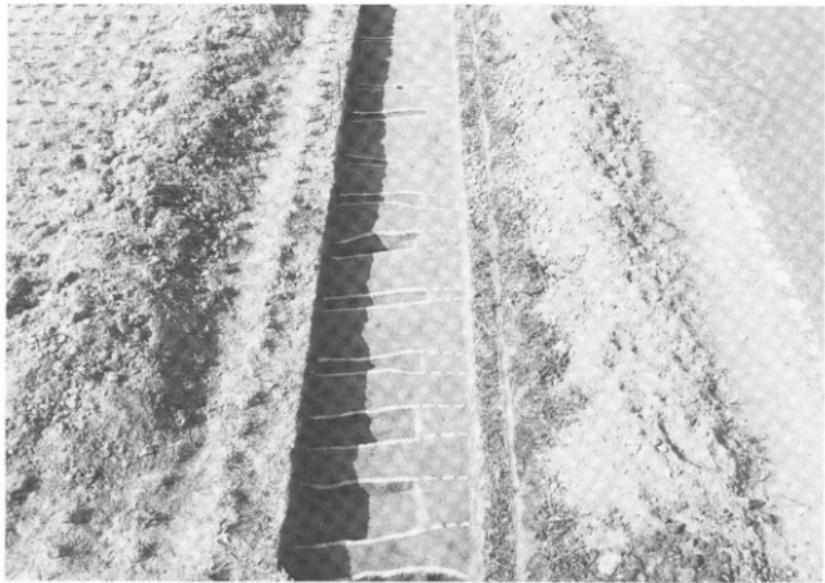
3-W区SD01



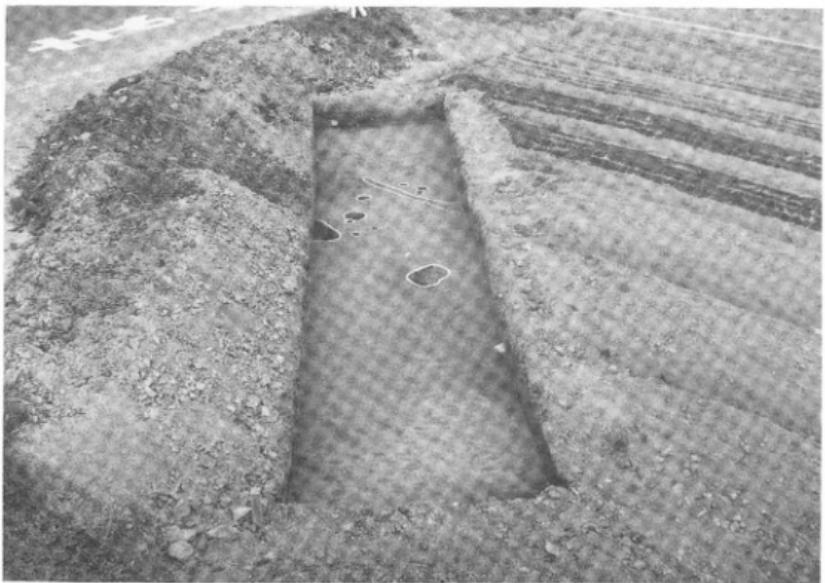
3—E区遺構検出状況



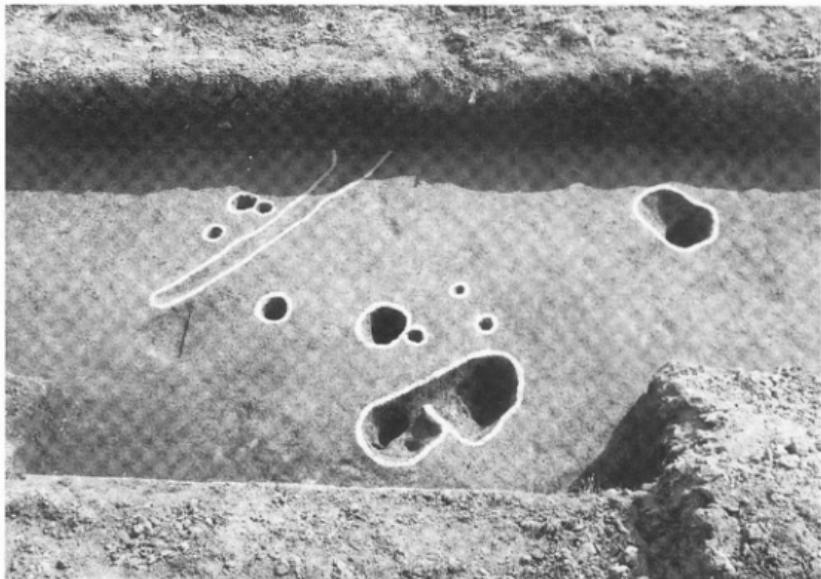
3—E区遺構完掘状況



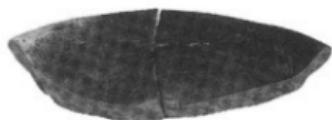
4 区完掘状况



5 区完掘状况全景



5区検出遺構



2



4

5区出土遺物

# 西又遺跡発掘調査概報

—県道富熊宇多津線道路改修工事に伴う発掘調査—

1990年3月

香川県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は県道富熊宇多津線道路改修工事に伴って実施した西又遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会が主体となって実施した。
3. 調査期間は平成元年11月9日から11月28日までの実働14日間である。
4. 現地調査は香川県教育委員会事務局文化行政課技師　國木健司が担当した。
5. 遺物整理に際しては森下英治、土井和幸両氏の協力を得た。
6. 掃図の一部に建設省国土地理院発5万分の1地図「丸龜」を使用した。
7. 本文の執筆・編集は國木が担当した。

## 目 次

|                   |    |
|-------------------|----|
| 第1章 調査に至る経過 ..... | 1  |
| 第2章 調査の経過 .....   | 1  |
| 第3章 立地と環境 .....   | 3  |
| 第4章 調査の結果 .....   | 5  |
| 第5章 まとめ .....     | 15 |

## 挿図目次

|                     |   |                   |    |
|---------------------|---|-------------------|----|
| 第1図 調査区配置図 .....    | 2 | 第6図 遺物実測図(壺形土器) … | 10 |
| 第2図 周辺の遺跡地図 .....   | 4 | 第7図 タ (壺形土器1)…    | 11 |
| 第3図 1・2・5区遺構配置図 …   | 6 | 第8図 タ (タ 2)…      | 12 |
| 第4図 土層実測図 .....     | 7 | 第9図 タ (高杯、底部)…    | 13 |
| 第5図 3・4区遺構平面図 ..... | 8 | 第10図 石器実測図 .....  | 14 |

## 図版目次

|                           |                                    |
|---------------------------|------------------------------------|
| 図版1 1区調査前の状況<br>1区調査風景    | 図版4 5区S D06遺物出土状況<br>5区S D06完掘状況   |
| 図版2 1区完掘状況<br>1区S D06完掘状況 | 図版5 S D06出土土器(甕)<br>S D06出土土器(壺、甕) |
| 図版3 3区完掘状況<br>4区実測状況      |                                    |

## 第1章 調査に至る経過

県道富熊宇多津線道路改修工事は幅約4mの現道を約8mに拡張する事業であり、昨年度当初の公共土木工事計画の予定には挙げられていなかったが、瀬戸大橋開通後の周辺道路網整備の一環として、坂出市川津町内での工事が急がれることになったものである。昭和63年7月11日に県土木部道路課より、当該路線内の埋蔵文化財の有無と取り扱いについて口頭協議があり、さらに同年9月16日付坂土発第523号で県坂出土木事務所長より県教育委員会教育長あてに照会文書が提出されたことから事前協議対象になったものである。県教育委員会では、8月30日に当該路線内の分布調査を実施し、さらに9月26日及び11月22～24日の2度にわたって試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵状況の確認を行った。その結果、拡幅予定地内の南端の延長約220mの部分で埋蔵文化財の包蔵が確認されたため、工事着手前の発掘調査が必要となった。発掘調査は、調査員の確保ができず昭和63年度中の実施が不可能となったため、今年度実施することになった。調査は、香川県教育委員会が主体となり、平成元年11月9日より11月28日まで実働14日間で実施した。

## 第2章 調査の経過

### 1. 調査区の設定

調査対象地が現道両側の拡張予定地であり、4m未満の幅狭な地区であったため、調査区も極めて狭く、トレンチ調査的なものにならざるを得なかった。調査区は現行地割によって細分し、まず1～4区を設定したが、調査の進行に伴い2区周辺の調査が不可欠となったため、新たに5区を設定した。(第2図)

1区はN・S両区ともに10m×1.5mの調査区で調査面積は30m<sup>2</sup>である。2区は北へと次第に拡幅する延長40mの不定形の調査区であり、調査面積は50m<sup>2</sup>である。3・4区はともに北に拡幅する調査区で、3区は60m<sup>2</sup>、4区は100m<sup>2</sup>の調査を行った。また、5区は10m<sup>2</sup>の調査区であり、総調査面積は250m<sup>2</sup>である。

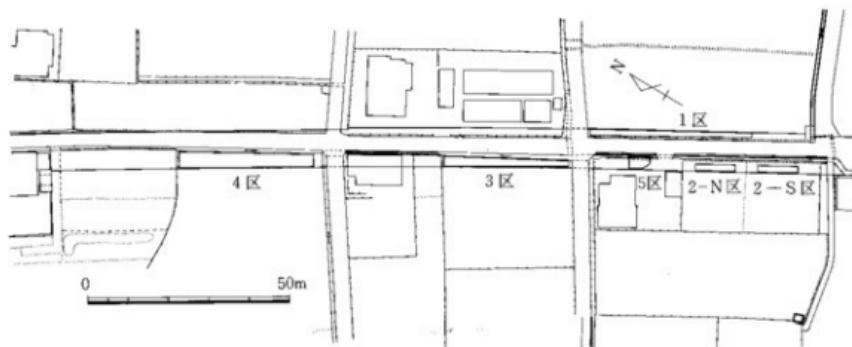
### 2. 調査の方法及び経過

調査はまず、2区より開始した。重機により掘り下げを行ったところ、耕作土下約20cmで遺物包含層が確認されたが、包含量は希薄であったので大半の部分で包含層下の遺構面まで重機を使用して掘り下げるにした。1-N区北端付近は包含層が厚く、遺物量もやや濃密だったので入力により発掘を行った。

1区は昨年度の試掘調査により北端付近でピット群を検出していた地区である。ピット検出面まで重機により掘り下げたところ、遺構は予想外に薄く、調査区中央付近で溝状遺構2条(S D04、06)、包含層等を検出した。これらについては、層位的価値が認められる可能性があったため、全て人力による発掘を行った。

次に3区の調査に移った。試掘調査により北端付近で溝状遺構を検出していたが、その周辺にピット群の広がりが検出された。遺構面が耕作土、床土直下と浅く、包含層も認められなかったので、遺構面まで重機により掘り下げ、遺構面精査、遺構発掘のみ人力で行った。4区も基本的には同様の方法で調査を行った。

5区は当初調査対象からはずしていたが、1区で確認したSD06内が多量の遺物を包含していたことから、その延長部分に新たに設定した調査区である。



第1図 調査区位置図

### 第3章 立地と環境

坂出市は香川県の海岸部ほぼ中央に位置する。県南部の讃岐山脈に源を発する大東川綾川の両河川沿いに開けた沖積平野と飯野山、角山をはじめとする独立丘陵とによっておおむね構成される地勢である。

西又遺跡は大東川下流域西岸の自然堤防状の微高地に展開している集落遺跡である。大東川流域には西又遺跡のさらに下流域においても元結木遺跡、本村東遺跡、下川津遺跡、伊勢町遺跡といった弥生時代～古墳時代の集落遺跡が立地しており、同時期における居住域として同川が好条件を提供していたと言えよう。また、遺跡の周囲には飯野山、常山、角山、青ノ山といった円錐形の独立山丘が発達しており、この山間部には旧石器時代以降の多種多様な遺跡が立地している。

大東川中下流域の低地部分については、縄文時代の頗著な遺跡は知られていないが、弥生時代前期に至る古段階に下川津遺跡、綾歌町次見遺跡、新段階の元結木遺跡、綾歌町行末遺跡等の所在が知られている。中期段階の集落遺跡は独立丘陵上及びその斜面に立地する傾向があり、金山南麓の長者原遺跡等が知られているが、詳細な内容が判明しているものはない。後期に至ると大東川流域の自然堤防上を中心として集落遺跡が拡大する。詳細な内容が判明しているものは下川津遺跡、元結木遺跡のみであるが、両遺跡の調査結果からすれば同時期の集落は周辺に広範囲に広がる可能性が強く、今後の調査結果の集積による集落構造と相互関係についての解明が期待される。

西又遺跡周辺には古墳の分布も濃密であり、全長79mをはかる田尾茶臼山古墳、同じく50mをはかる吉岡神社古墳のほか、蓮尺茶臼山古墳、三の池古墳といった前方後円墳が所在している。また、大東川河口付近東岸の独立丘陵である聖通寺山山頂には、付近で唯一の積石塚である聖通寺山古墳が所在する。中期古墳の展開は今ひとつ明らかではないが、大東川中流域東岸の飯山町城山には5世紀末頃の古式群集墳である城山古墳群が所在する。後期に至ると、県内でも丸龜市青の山山麓一帯に県内でも有数の群集墳である青の山古墳群が所在する他は、周辺の丘陵部に分散して1基～数基と小規模に群集する傾向がある。

大東川流域は古代以降の遺跡も多数知られており、中流域に白鳳期の建立とされる飯山町法熱寺跡、下流域に平安初期に建立された法楽寺跡等の古代寺院が所在している。

西又遺跡は弥生時代以降の遺跡が濃密に分布する地域の中心ともいえる地域に所在しており、特に弥生時代各時期の集落遺跡と相互にどのような関係をもって成立し、展開していたかを解明することは、今後大東川流域の古代文化成立・発展を有機的に考える上で重要となってくるであろう。



第2図 周辺の遺跡地図

## 第4章 調査の結果

### 1. 調査結果の概況

1区では北端付近でピット群を検出したほか、調査区中央やや北寄りの地区で調査区にほぼ直交する溝状遺構（S D 06）及び同溝埋没後の溝状遺構（S D 04）の切り合いが確認された。S D 06最下層付近には多量の弥生土器等の遺物が含まれる。S D 06は上端幅3～5m、深さ0.6mをはかる大規模なもので、埋土は最下層に薄い砂層堆積がみられる他は概ね褐灰色系粘質土である。埋土の状況が丸亀市中の池遺跡で検出した環濠に似することからすれば、環濠である可能性が高いと思われる。また、埋土は弥生土器の単純包含層を8層に区分し、層位発掘を行ったが、層位的価値は認められなかった。同遺構より南に約10mの地区には浅い落ちが認められたが、埋土の状況はS D 06中・上層と同一である。その他S D 06、S D 04以南の地区では遺構は検出されなかった。なお、遺構面となる暗黄灰色粘土質土上には約20cmの厚さで一様に暗灰色粘土及び黄灰色系粘質土の堆積が認められたが、同層中には少量とはいえ弥生土器、土師器のほか須恵器片も含まれる。従って、古墳時代後期以降に同層が形成されたものと考えられる。

2区ではN区で耕作土下に黄灰色系粘質土（須恵器包含層）、灰黑色粘質土（弥生土器包含層）の堆積が確認されたが、S区では後者が欠如していた。両包含層ともに、遺物量はさして多くない。地表面がS区南端へと次第に高くなり、この微高地部分で3条の溝状遺構を検出している。いずれも調査区をほぼ直交する方向に構築されたものである。いずれも幅20～40cm、深さ10～20cmの小規模な遺構で、埋土は暗灰色砂質土である。サヌカイト剝片等の遺物が出土している。

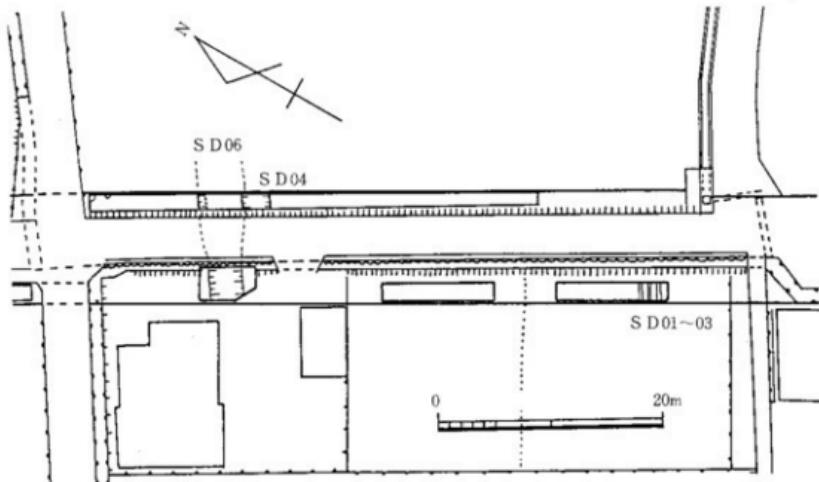
|            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1.西又遺跡     | 8.長者原遺跡    | 15.三の池古墳   |
| 2.元結木遺跡    | 9.笠山古墳群    | 16.折居古墳    |
| 3.下川津遺跡    | 10.聖通寺山古墳  | 17.蓮尺茶臼山古墳 |
| 4.本村東遺跡    | 11.田尾茶臼山古墳 | 18.城山古墳群   |
| 5.伊勢町遺跡    | 12.岡宮古墳    | 19.法熱寺跡    |
| 6.爺が松古墳    | 13.青の山古墳群  | 20.次見遺跡    |
| 7.ハカリゴーロ古墳 | 14.吉岡神社古墳  | 21.行末遺跡    |

第1表 周辺の遺跡一覧

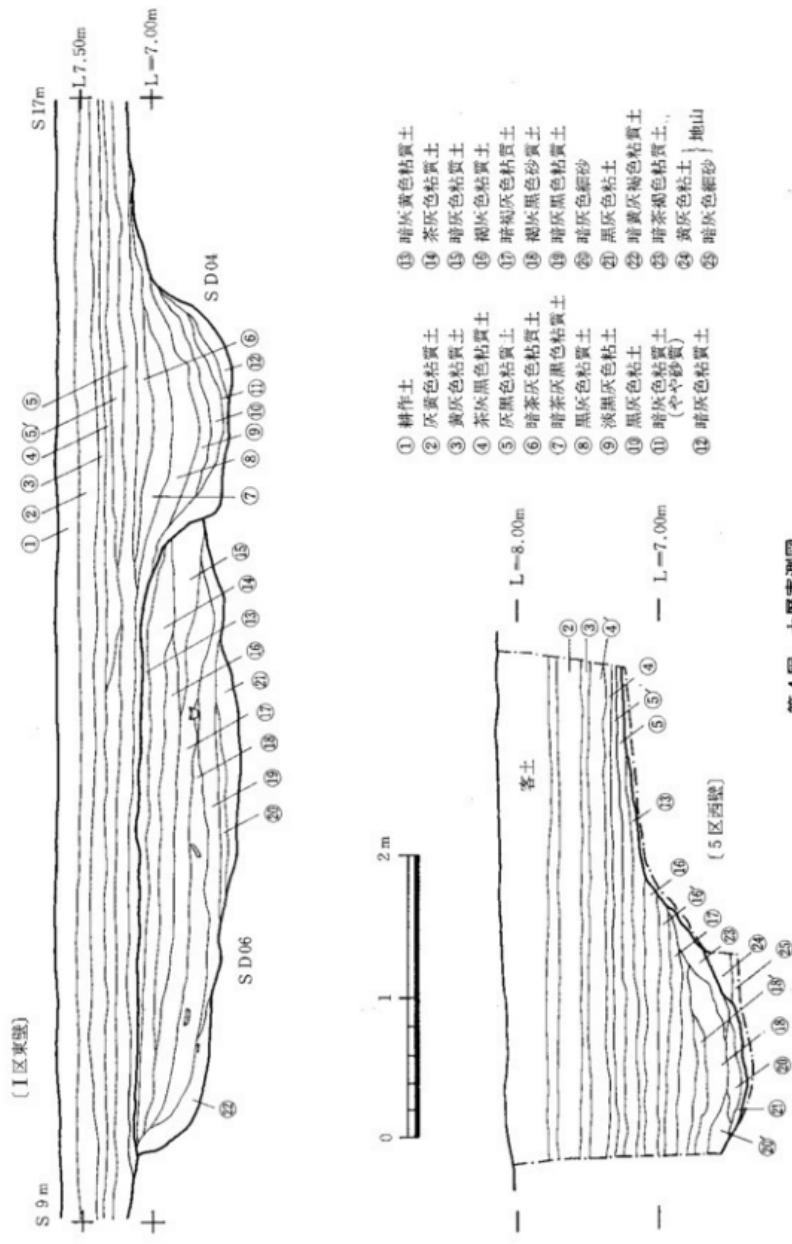
3区以北はやや様相を異にする。3区は床土下約15cm、4区は耕作土、床土交下を遺構面とし、包含層の形成はない。従って、この地区はSD06以北の微高地の居住域として機能していたものと考えられる。3区では北端付近で調査区に斜行する溝状遺構(SD05)を検出した。その他ピットも検出しており、検出範囲は調査区のほぼ全域に及ぶものの、密度としては希薄である。規則的に配置したものもなく、建物跡の復元はならなかった。また、出土遺物もピット中より若干量の弥生土器片、サヌカイトが出土したのみであったので時期決定も困難であるが、弥生時代前期～中期の土器片を出土したSD05・06と遺構面を同じくし、また埋土が同一の灰黒色粘質土であったため、ほぼ併行する時期の所産であろうと思われる。

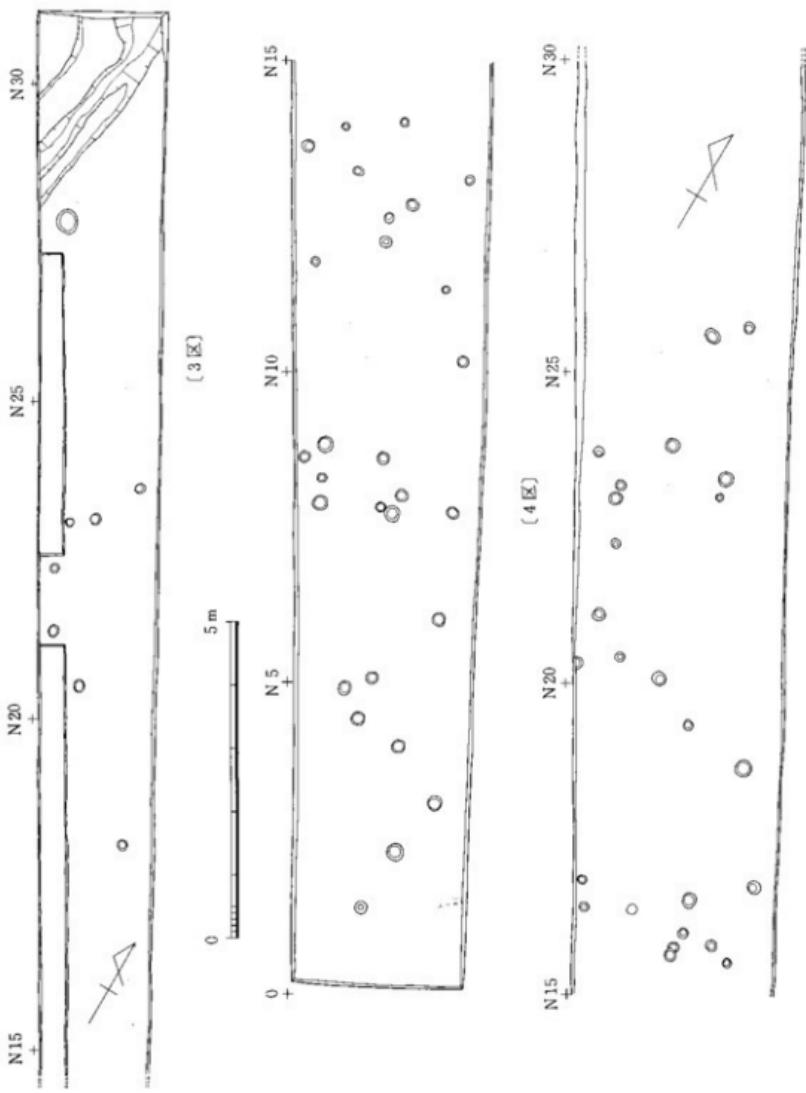
4区では調査区のほぼ全域でピット群を検出している。密度も3区と比較して濃密となるが、やはり規則的な配置をしたものもなく、建物跡の復元はならなかった。また、ピット中の出土遺物も土器片サヌカイト片が極めて少量であったため、詳細な時期決定は困難であった。なお、調査区北端付近及び南端付近は厚い砂層上にピットが構築されている。従って、自然河川埋没による微高地の拡大に伴い居住域として機能していたものと推定される。

5区では、1区で検出したSD06の延長部が確認された。1区で検出した位置と併せれば同環濠がほぼ東西方向に延びるものと考えられる。同環濠の屈曲方位は併然としないが、北側の3・4区で多数のピット群を検出しており、居住域は北方に存在したものと推定される。



第3図 1・2・5区遺構配置図





第5図 3・4区遺構平面図

## 2. 遺物

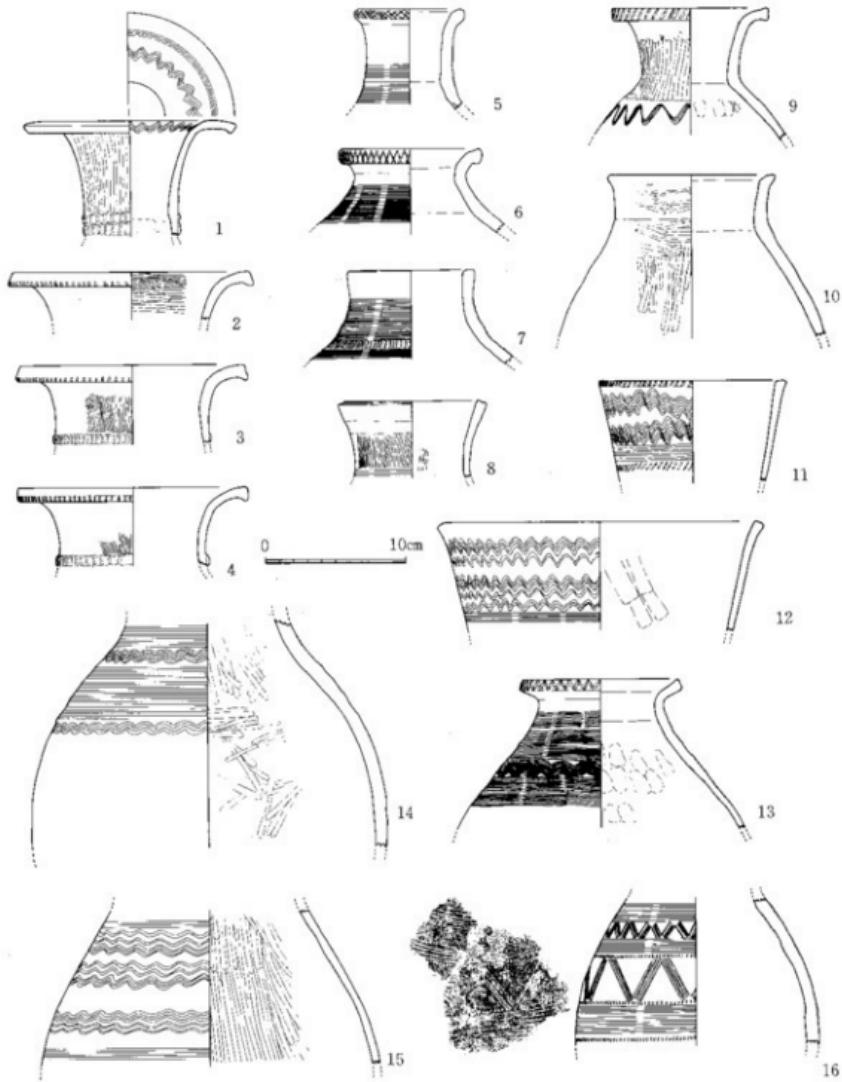
今回出土した遺物は弥生土器、須恵器、石器類等コンテナ10杯分である。調査区分では1・2・5区からの出土がほとんどであり、3・4区からの出土は極めて少ない。今回は多量に弥生土器が出土したS D 06内出土遺物について報告する。層位的には最下層付近から混在した状態で出土しており、層位的価値は認められなかった。

### (壺形土器)

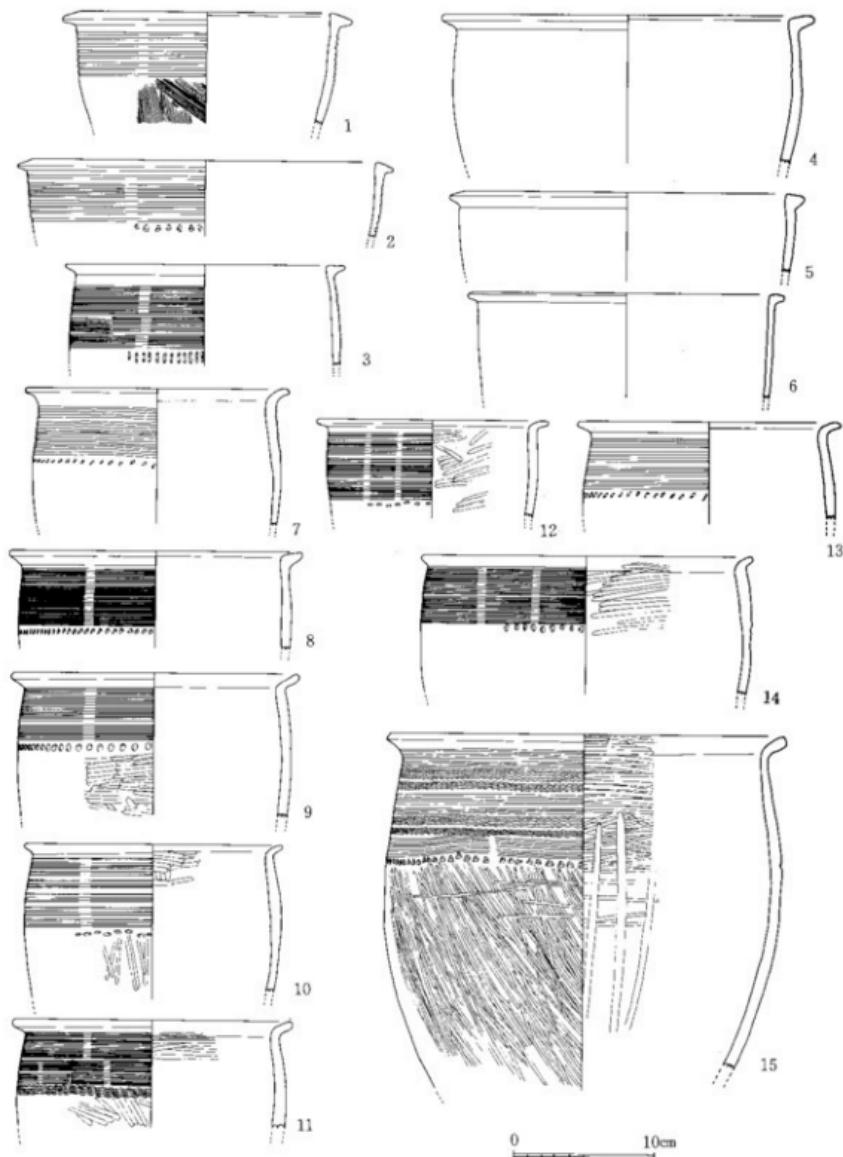
第6図1～4は朝顔形に大きく外反する口縁部を持つ。端部は下方に拡張し、2～4は口縁部下半に刻み目を施している。1は内面に4条からなる櫛描波状文を施す。また、縁部下端には指頭圧痕文をつけた凸帯をめぐらしている。5は筒状の縁部が口縁部で短く外反するもので、端部に範描斜格子を施している。また、縁部下半は5条からなる櫛描文を施す。6・13はくの字形に外反する口縁部を持ち、わずかに肥厚した端面に範描による山形文、斜格子文がみられる。胴部の櫛描文は頗著で、13は肩状に施文した波状文を含む。7は短く直立する縁部を持ち、縁部以下の櫛描文が頗著である。また、廉状文状の連続刺突文を含む。8は外反気味に直立する口縁部をもち縁部下端に範描文がみられる。9は口縁部が水平方向に短く外反し、肥厚した端部に範描沈線を施す。外面は縁部ヘラミガキ、胴部櫛描波状文を施す。10は短く直立する口縁部を持ち、端部を外方に拡張し、内面にやや広い端面を形成している。外面はヘラミガキ。11・12は筒形の胴・縁部を持ち、外面を櫛描波状文、直線文を施す。11は口縁部に刻み目を施し、12は内面板ナデである。14～16は胴部片であり、14・15は櫛描波状文、直線文の発達が著しい。16は直線文は範、山形文は櫛による施文で、両者の間に刺突文を施す。第8図11・12はくの字形口縁をもち、胴部の張りが頗著な土器である。口縁端部の肥厚も大きくなり、端面も形成されている。11には胴部に列点文が施され、列点文以上はハケ目、ヨコ方向のヘラミガキによる調整を行っている。

### (甕形土器)

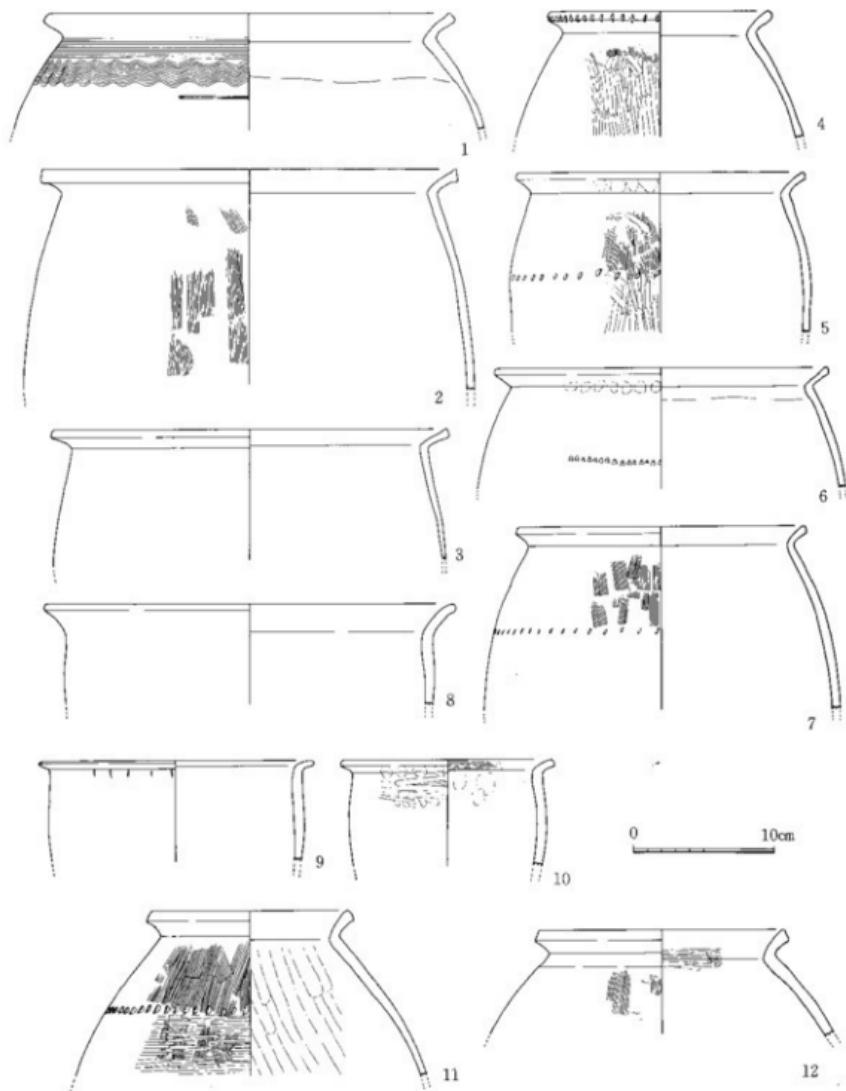
第7図1～6は逆L字口縁、断面三角形口縁を持ち、胴部は直立するもので、外面の施文法により3種に区分される。1・2は8～9条の範描沈線を持つ。3は6条を単位とする櫛原体により4回施文された櫛描文を持ち、文様下に列点文を持つ。4～6は無文土器である。7～15は口縁部がくの字形に近い屈曲をもち短く外反するもので、胴部は直立気味で張りを欠く。3～9本の櫛原体による櫛描文が発達し、文様下には列点文、刺突文を施すものが圧倒的に多い。15は口縁部が比較的長く、端部には肥厚がみられ、また胴部もやや張りをもつなど新しい様相は認められる。



第6図 遺物実測図(壺形土器)



第7図 遺物実側図(變形土器1)



第8図 遺物実測図(変形土器2他)

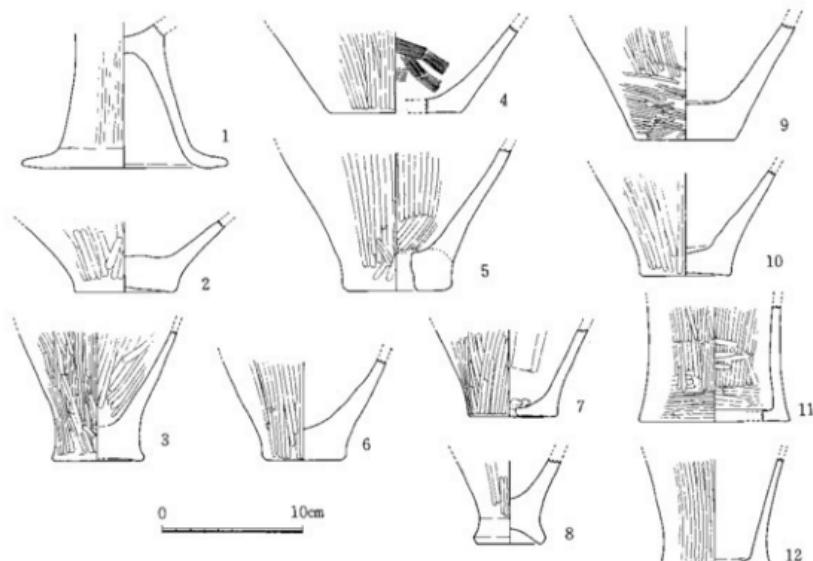
第8図1～7はくの字形に外反する口縁部を有し、胴部は張りを持ちはじめる。櫛描文は1で直線文、波状文がみられる他は施されておらず、胴部に列点文のみ残存する例が多い。口縁端部もやや肥厚が認められ、端面を形成しつつある。4には口縁部に刻み目が施される。外面調整はヘラミガキの他ハケ目調整も顕著である。8～10は如意状、逆L字状口縁を有するが、櫛描文は施されていない。9には口縁部直下は列点文が施されている。

#### (高杯・底部)

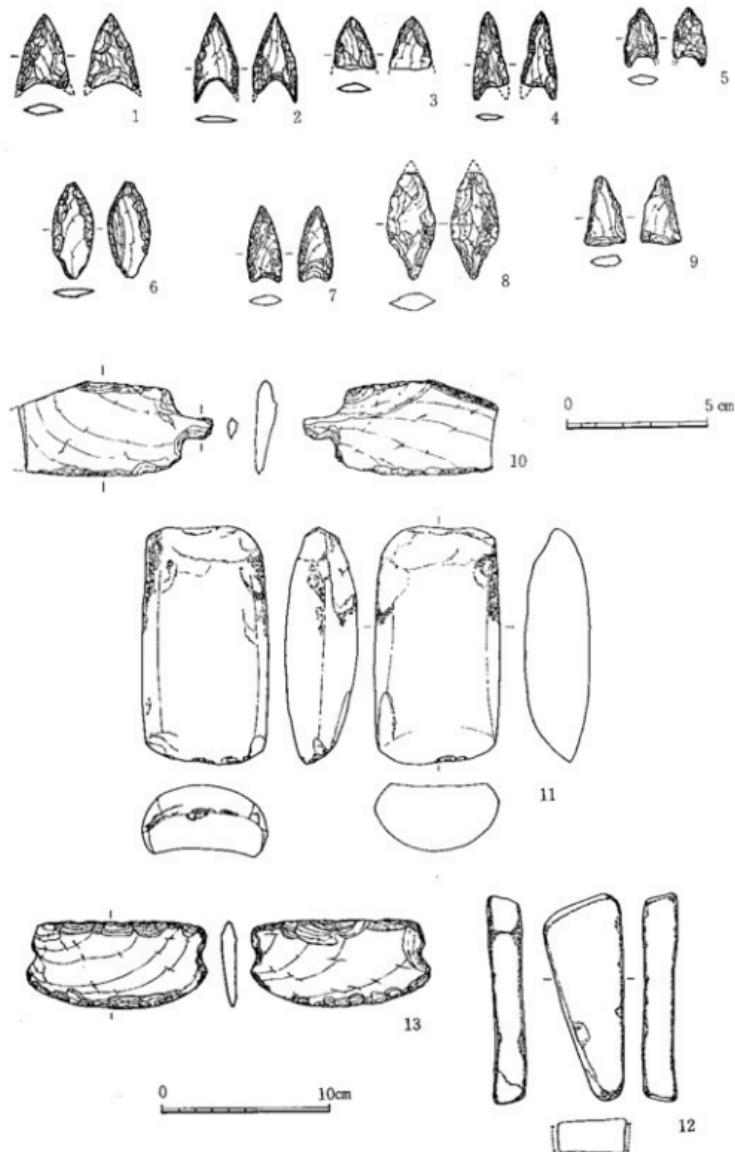
第9図1は高杯の脚部と推定されるもので、ハの字形に聞く支柱から裾付近で水平方向に急に開く脚部をもつ。底部は平底、上げ底でヘラミガキが顕著である。5・7は底部に焼成後の外面からの穿孔がみられる。11・12は筒形土器の底部になるものと推定される。

#### (石 器)

S D 06内から出土した石器は石鎚、石匙、石斧、打製石庖丁、砥石、凹み石等である。石鎚は平基無茎式、凹基無茎式の3種がある。10は茎を持つ縦型の石匙状石器である。11は石斧で長さ14.1cm、厚さ3.7cm、幅7.5cmをはかる。12は3面の研磨面がみられることから、砥石と推定される。13はサヌカイト製の打製石庖丁である。



第9図 遺物実測図(高杯・底部)



第10図 石器実測図

## 第 5 章 ま と め

今回の発掘調査は小規模な県道拡幅工事に伴うものであったため、遺跡の全体像を伺い知ることはできなかったが、環濠と推定される S D 06 の他小溝状遺構及び多数のピット群が検出された。S D 06 以北の地区には同濠と遺構面を同一とする多数のピット群を検出しており、環濠内の居住空間と推定されることから、4 区以北に同様の環濠部が検出される可能性が高い。4 区のピット群は耕作土直下からの検出であり、遺構面上からの遺物出土もなく包含層の形成を認められなかつたことからすれば、全面にわたって削平を受けているものと推定される。環濠内は最下層付近に薄い砂層の堆積が認められたが、中位より上層は粘質土の水平堆積状況が認められる。また、同埋土中には濠底出土遺物と同時期と推定される土器の細片が少量のみ含まれ、後出する時期の遺物は出土していない。従って、比較的短期間で集落は廃絶し、その後は比較的おだやかな状況で環濠が埋没したものと推定される。

今回の発掘調査では遺構の全体像は把握できなかったものの、S D 06 からの出土土器には注目すべき点が多い。壺形土器については口縁部形態、施文法等から以下の 3 類に分類しうるものと推定される。

第 1 類 …………… 第 7 図 1～5 及び第 8 図 8～10 が相当する。口縁部形態は逆 L 字形口縁、如意状口縁、断面三角形口縁の 3 種がある。籠描沈線は 8～9 条と多量化しており、沈線文下には列点文の施されるものもある。籠描沈線文が施されていないものについては疑問も残るが、口縁部形態からみて一応同一類型として考えておく。

第 2 類 …………… 第 7 図 7～15 が相当する。口縁部形態はくの字状に短く外反するもので、端部は丸くおさめられている。胴部の張りは未だ顕著でない。胴部は最大径部位付近まで櫛描文様が施される。櫛描文様下には列点文、刺突文が施される例が多いが、11 のように細かな波状文状施文により文様帶を収束させたものもある。また、外面の櫛描文様部以下及び内面のヘラミガキが顕著である。ただし、15 については口縁端部がやや肥厚し、胴部も張りをみせるなどやや新しい様相は認められる。また、櫛描文様の構成に波状文と直線文を交互に配するなど、籠描沈線文の多条化に対応するため出現したと推定される櫛描文に、さらに装飾的色彩を附加した段階の所産とみることもできよう。

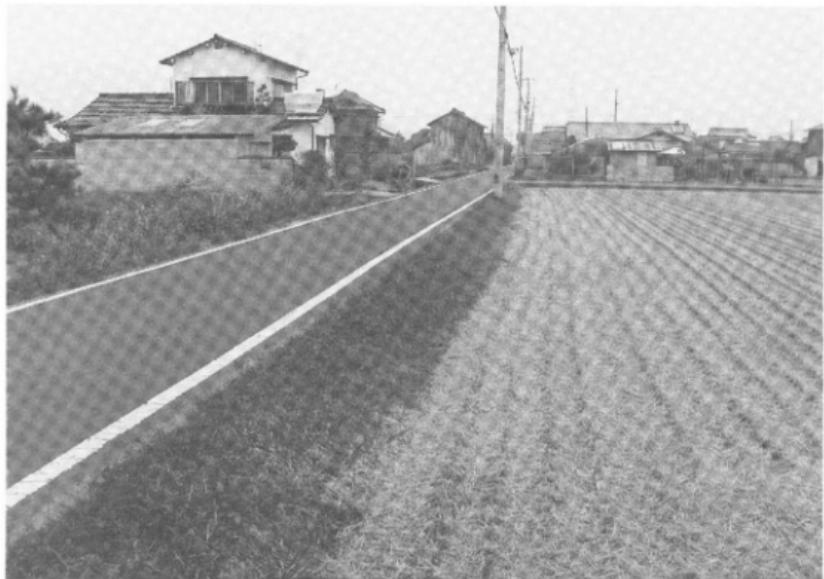
第 3 類 …………… くの字形に外反する口縁部を有し、端部はやや肥厚し、端面を形成し始めるもので第 8 図 1～7 が相当する。櫛描文も 1 に残るが、施文は行わずに櫛描文様下の列点文のみ留めるものが多い。また、外面調整は胴上半部でハケ目が多用される。

第 1 類は形態・文様構成について五条 II 式、三井 II 式に共通する部分が多く前期後半代に比定されるであろう。第 2 類は櫛描文様が出現するが、共伴する壺形土器の様相が明確でなく、

時期決定は困難である。一応、前期末～中期初頭の範疇で把握しておく。第3類は南方Ⅱ b、c、あるいは雄町3の内容に共通する部分が多く、中期前葉に位置付けられよう。

壺形土器の形態的分類は先術のとおりであるが、各々の編年的位置付け及び壺形土器との対応関係については明らかではない。しかしながら、櫛描文が多用化されており、大半が壺形土器2類あるいは3類と共に関係にあると推定されることから、前期末～中期前葉の年代観は与えられよう。壺形土器の型式分類と編年的位置付けの詳細な検討は他日を期したい。

西又遺跡は弥生時代前期後半～中期前葉に至る環濠集落であろうと推定され、前期末段階で廃絶する集落遺跡群のみであった県内では初見であることから、中期への移行期の様相を具体的に知りうることのできる点で学術的価値は極めて高いものと言えよう。残念ながら今回は遺構内容に不明な部分が多く、また出土土器に関する詳細な検討も行えなかったが、今後の調査・研究に期待したい。



1区調査前の状況



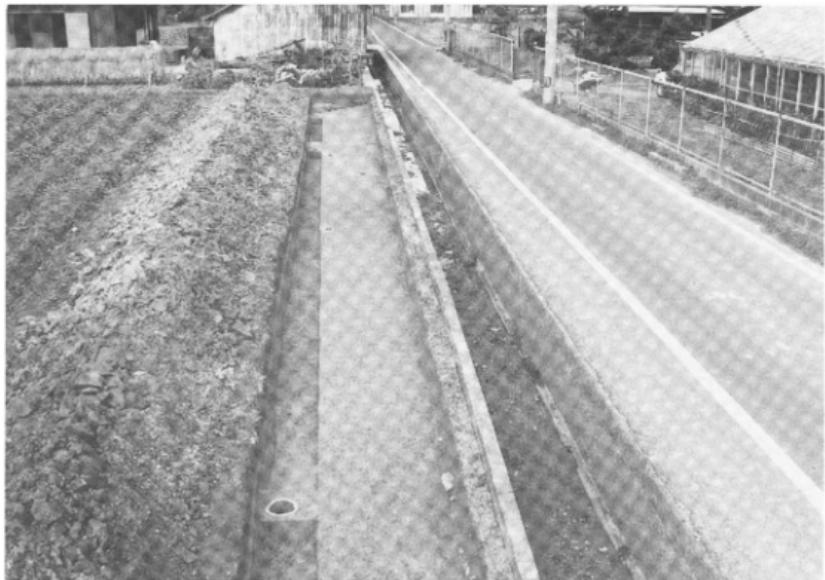
1区調査風景



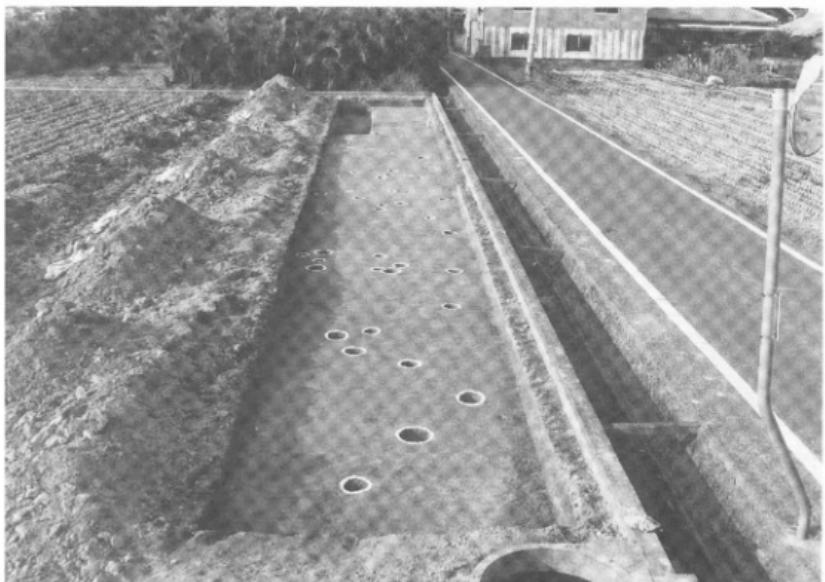
1区完掘状況全景



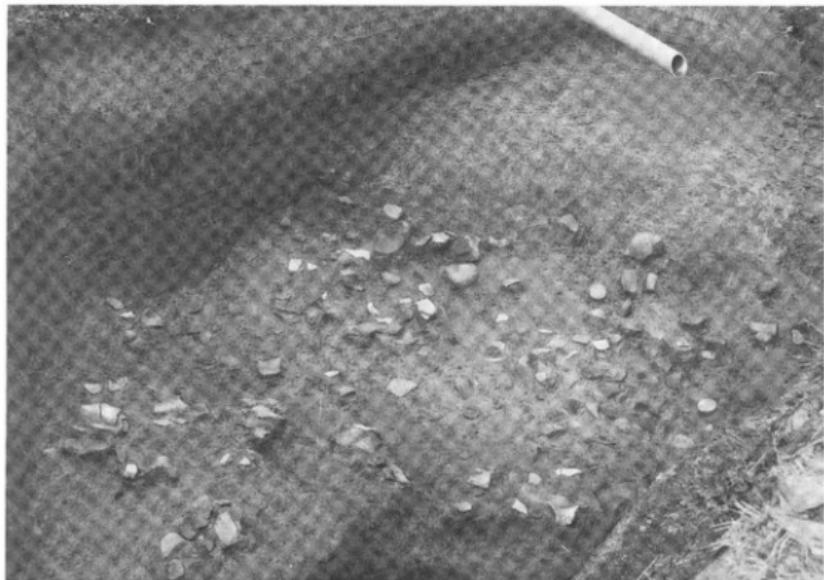
1区SD06完掘状況



3 区完掘状况



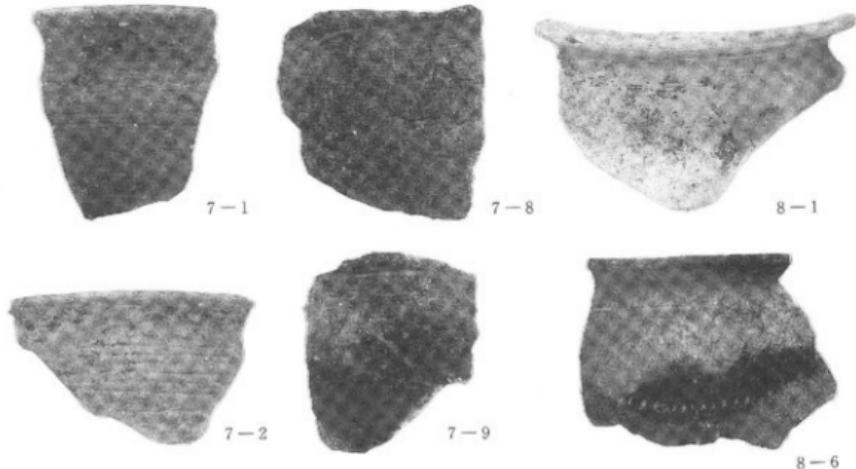
4 区完掘状况



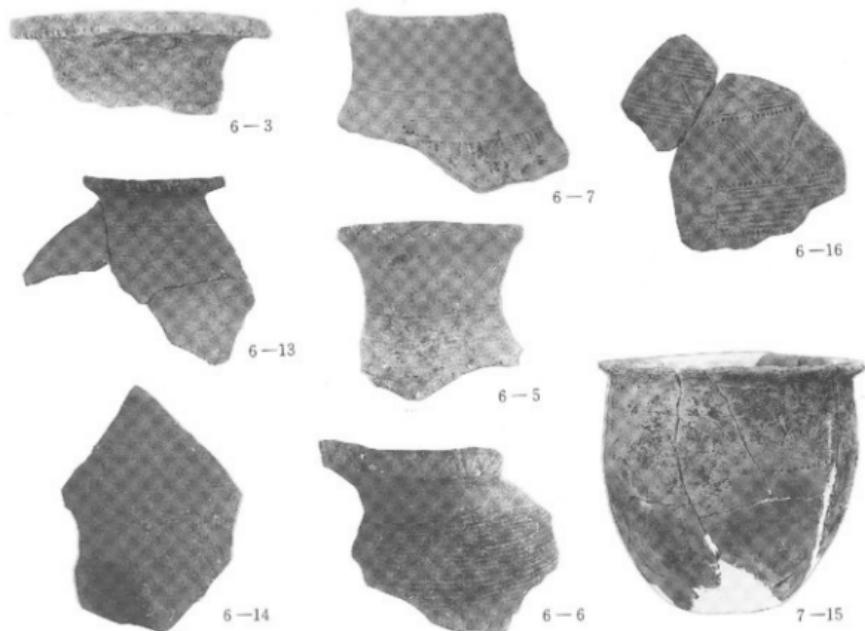
5区SD06遺物出土状況



5区SD06完掘状況



SD06出土土器(甕)



SD06出土土器(壺、甕)

# 堂之岡遺跡発掘調査概報

1990年3月

香川県教育委員会

## 例　　言

1. 本報告書は国道377号特殊改良一種事業に伴い、香川県教育委員会が実施した、観音寺市原町1458番地に所在する堂之間遺跡の発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会事務局文化行政課主任技師 岩橋 孝が担当し、平成元年10月30日から12月1日までの実働16日間で実施した。
3. 挿図の一部に建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「観音寺」を使用した。
4. 本報告の執筆は調査担当の岩橋が行った。
5. 調査にあたっては香川県土木部道路課、観音寺土木事務所、観音寺市教育委員会の協力を得た。

## 目 次

|                      |   |
|----------------------|---|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 ..... | 1 |
| 第2章 立地と環境 .....      | 1 |
| 第3章 調査の概要 .....      | 2 |
| 小結 .....             | 3 |

## 挿図目次

|                        |   |
|------------------------|---|
| 第1図 周辺の遺跡分布 .....      | 4 |
| 第2図 調査対象地・調査区位置図 ..... | 4 |
| 第3図 遺構平面図 .....        | 5 |
| 第4図 調査区南壁土層図 .....     | 5 |

## 写真目次

|                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 写真1 経塚古墳           | 写真8 暗褐灰色土出土遺物        |
| 写真2 調査前の状況         | 写真9 暗褐灰色土出土遺物        |
| 写真3 遺構検出作業風景       | 写真10 暗褐灰色土出土遺物       |
| 写真4 遺構完掘写真撮影前の作業風景 | 写真11 暗褐灰色土出土遺物       |
| 写真5 溝④断面土層         | 写真12 土坑⑥出土遺物         |
| 写真6 遺構完掘状態(北から)    | 写真13 ピット④出土土師器等      |
| 写真7 遺構完掘状態(北東から)   | 写真14 経塚古墳西田中採集滑石製紡錘車 |

## 第1章 調査に至る経緯と経過

香川県教育委員会は、毎年度当初に当該年度の国・県関係の公共土木工事を関係機関に照会し、その結果に基づいて計画的な埋蔵文化財保護行政を行っている。

観音寺市新田町から大野原町丸井までの約2.6kmを事業区間とする国道377号特殊改良一種事業（バイパス建設）については、昭和63年度の公共土木事業照会に対する香川県土木部道路課からの回答で把握した。工事場所と遺跡地図を照会した結果、工事場所に隣接する観音寺市新田町1381番地に周知の埋蔵文化財包蔵地である堂之岡遺跡（弥生土器、土師器片散布地）が所在するため、工事実施中に香川県教育委員会の担当職員が立会う旨通知し、調査の協力を要請した。そして昭和63年8月、周知の堂之岡遺跡の西方約150mの丘陵西側斜面の掘削工事に立会ったが、遺構・遺物は発見されなかった。この際の協議の中で、立会調査地の東側の墓地およびその東方約170mの市道栗屋堂之岡線東脇の宅地など3ヶ所については、工事着手の際に立会調査を行うことで協議が整った。

そして平成元年6月、宅地部分の工事に当って立会調査および試掘調査を実施したところ、地表下約35cmの黄色粘質土上面で遺構が発見され、それらは工事範囲に展開することが判明し、平成元年6月12日付元観土発685号で観音寺土木事務所長から文化財保護法第57条の6第1項による遺跡発見の通知が提出された。このことについて香川県教育委員会は、遺跡の状況と工事内容を勘案した結果、事前の発掘調査を実施することが適当と判断し、この旨を平成元年6月17日付元教文発第16—5号で観音寺土木事務所長あてに通知した。

その後、事前の発掘調査の実施について香川県教育委員会と道路課との間で協議を重ね、平成元年10月30日から発掘調査を行った。10月31日に重機による表土除去に着手し、11月1日から現場作業員による掘削を始め、11月18日に現場作業を終え、11月30日に埋戻しを行い、12月1日に現場を引渡した。

## 第2章 立地と環境

香川県西端の三豊平野は財田川・柞田川が形成した沖積平野が広がり、両河川に挟まれた中流域には阿讃山脈の前山の一つである菩提山から、北西方向に丘陵状の洪積台地が延び、この台地上は開析



写真1 経塚古墳

により小規模な谷筋が刻まれ、多少の起伏が認められる。

周辺の遺跡分布をみると、縄文～弥生時代にかけて財田川南岸の平地に集落跡が出現する。一方、台地上には弥生後期頃の集落跡や散布地が点在し、周辺部からは青銅器が出土しており、この頃が、この地域の開発の一画期と考えられる。

古墳時代には台地の東南域に、後期のものを中心に古墳が數多く分布し、台地西縁の独立丘陵の母神山山麓には後期古墳が県下有数の群集形態の分布をみせている。しかし、この時代の集落遺跡に関してはまだ不明な点が多く、台地先端部の村黒遺跡でその所在が推定される程度であるが、柞田川南岸の柞田八丁遺跡では後期の堅穴住居跡が數棟確認されている。

奈良～平安時代の集落跡についてもほぼ同様であるが、中世以降の集落跡に関しては近年の発掘調査等により資料が蓄積されつつある。

堂之岡遺跡は前記の台地南西部の、北西方向に延びる小丘陵の東縁、傾斜地に位置する。遺跡の南西100～150m程の低丘陵上には周知の埋蔵文化財包蔵地として、弥生土器、土師器片が出土した堂之岡遺跡、須恵器杯、高杯、刀、勾玉、管玉が出土した経塚古墳、須恵器高杯、刀が出土した幸助蔵古墳が所在する。また北東約400mには弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物が出土した中原遺跡が所在する。

### 第3章 調査の概要

#### 1. 調査の方法

調査対象地は在来の市道との連結部で三角形に広がるもの、概ね東西方向に細長いので、調査区は路線に平行して東西に長い長方形に設定し、市道の車の交通量が比較的多いため、発掘調査期間中の安全を考慮して、市道の路肩から3m程東を調査区の西端とした。そして、調査期間中は調査区の西端と市道路肩との間にロープを張りわたして事故防止に努めた。

掘削は立会・試掘調査時の土層観察結果をもとに、表土除去の際に遺構が刻まれる黄色粘質土上面まで一気に重機で掘削するのを基本とし、調査区のはば中央に南北の土層観察用のあぜを残した。表土除去後は入力により遺構の検出に努め、遺構掘削は入力で行った。

調査記録は、土層図を調査区の南壁の東西方向と、これに直交する中央あぜの東壁のものを縮尺 $1/50$ で作成した。また遺構配置図は方位にあわせて1m方眼を組み、縮尺 $1/50$ で作成した。写真撮影は発掘作業の進行にあわせて適宜行った。

実掘面積は、調査対象面積350m<sup>2</sup>のうち作業用通路、排土置場を除く、190m<sup>2</sup>である。

## 2. 層序

調査対象地は、北西方向に延びた丘陵の東斜面に建っていた家屋が退去した場所で、調査前の地表はほぼ平らにならされ、西から東へ緩やかに傾斜し、東西両端での比高は約1.7m。表層は家屋撤去の際の整地作業等による搅乱を受け、また市道近くでは1mを越える客土層の下に黄色粘質土の地山が現れる。調査区は中央の平均的な場所では、調査前の地表から30~40cm下が地山上面で、本来の堆積状態をとどめていると判断されたのは、地山上位の10~20cmの土層である。

調査区南側土層の観察によれば、地山上面をたどると西端から約9mはほぼ水平で、これ以東は緩やかに西へ傾斜する。また標高45.8mでほぼ水平な地面が形成されたことが観察され、この面が退去となった家屋を建てるために造成した整地面と考えられる。

調査対象地が丘陵斜面であることを考慮するならば、その時期は不明だが開墾・造成等により本来の地貌は失われていると考えられる。

## 3. 遺構と遺物

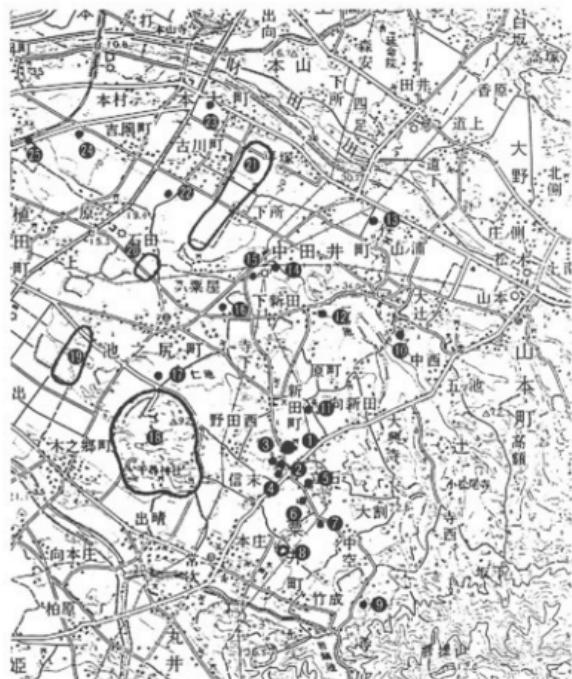
遺構はピット180余、土坑14、溝2が検出された。これらの遺構の埋土は褐色土、暗褐色灰色土、灰色土、黃白色土、黃灰色土の5種類で、後2者は近・現代のものである。多数検出されたピットには径30cm前後、深さ40cm前後の柱穴と考えられるものもあるが、数個が一列に並ぶ程度で組合って方形を形成するものは見当らない。ピットの埋土は褐色土のものが主体である。溝Ⓐ・Ⓑおよび溝Ⓒで囲まれた範囲には暗褐色土が堆積し、18世紀を中心とする時期の肥前系陶磁器、中世後半以降の土師器、古墳時代の須恵器などが出土した。また土坑Ⓓについても同様である。溝Ⓒで囲まれた範囲は周囲と一段低く、地山（黄色粘質土）上面での比高は、西側で約35cm、南側で約20cm。この範囲の西部では所謂タタキ面を思われる土の堆積がみられた。また調査区東端で、溝Ⓓを壊して土師器の大甕が2個並べて埋設されていた。

遺物は28ℓ入コンテナ3箱出土した。近世の肥前系陶磁器、備前焼、土師器、瓦器、中世後半以降の土師器鍋・釜、古墳時代の須恵器のほか、不明焼粘土塊などがある。

## 小結

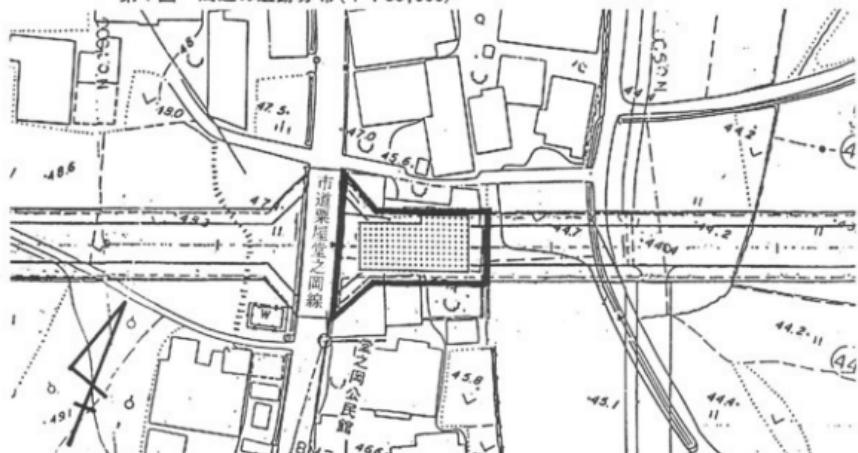
家屋撤去後的小範囲の調査であったが、検出した遺構数は多かったものの、それらの全体像を復元することは難しい。溝で区画された範囲は何らかの建物に関連するものと考えられるが推定の域を出ない。検出した遺構は層序や出土遺物から近世中頃~後半を中心とする時期のものと考えられる。

調査地付近にかつて寺小屋があったとの伝承と堂之岡の地名は、これらの遺構の性格付けを行う際の一つの手懸りとなろう。

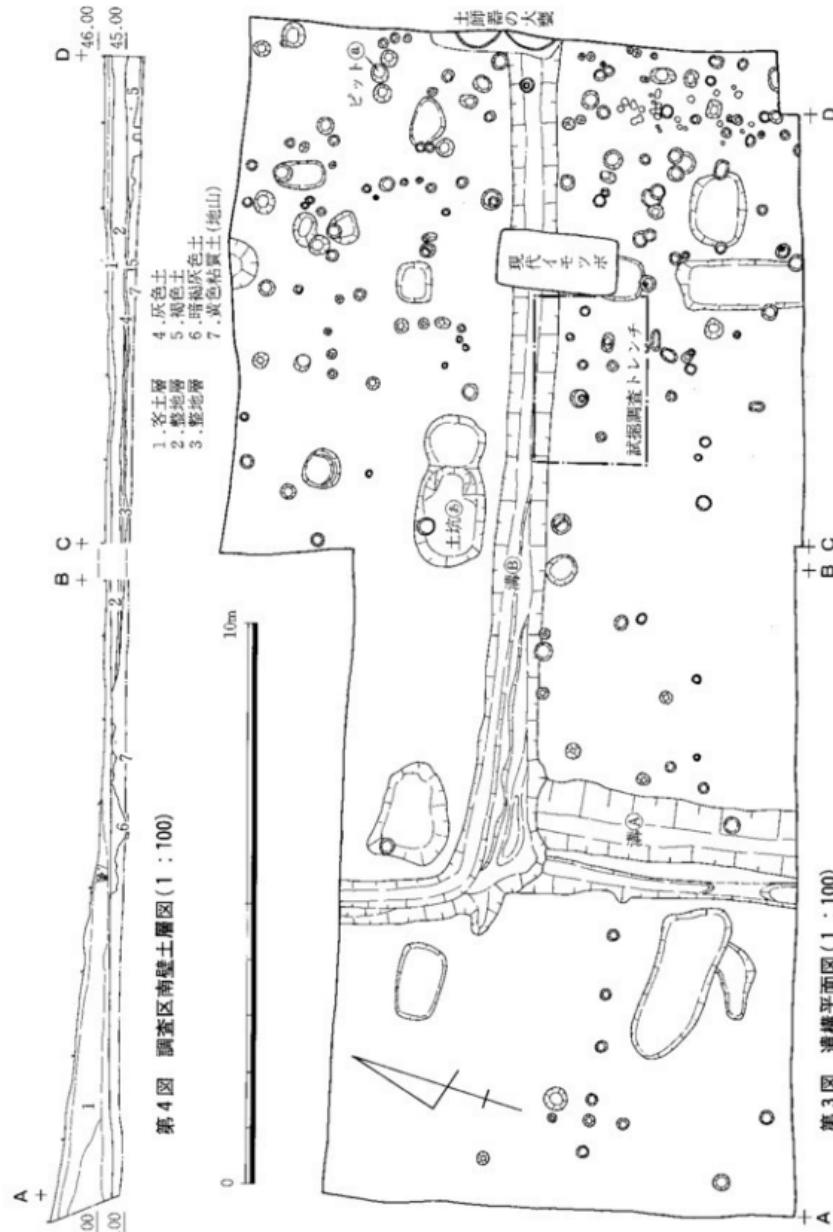


第1図 周辺の遺跡分布(1:50,000)

- ①調査場所
- ②堂之岡遺跡  
(弥生土器、土師器散布地)
- ③経塚古墳(後期)
- ④幸助藪古墳(後期)
- ⑤おう塚古墳(後期)
- ⑥立石古墳(後期)
- ⑦山岡古墳(後期)
- ⑧上野古墳群(後期)
- ⑨藤の谷銅劍出土地(弥生)
- ⑩辻銅矛出土地(弥生)
- ⑪中原遺跡(弥生、後~古墳、前)
- ⑫青塚古墳(中期)
- ⑬石ノ経遺跡(弥生、後)
- ⑭向井西の岡遺跡(弥生、後)
- ⑮下新田原遺跡(弥生、後)
- ⑯中新田遺跡(弥生、後)
- ⑰久染遺跡(弥生、後)
- ⑱母神山古墳群(後期)
- ⑲長砂古墳群(弥生、古墳、中世)
- ⑳石田遺跡(古墳、中世)
- ㉑一ノ谷遺跡群  
(弥生、中世、近世)
- ㉒古川銅錐出土地(弥生)
- ㉓桶ノ口遺跡  
(縄文、晩~弥生、前)
- ㉔横田遺跡  
(須恵器、土師器散布地)
- ㉕村黒遺跡(弥生、後~古墳、中)



第2図 調査対象地・調査区位置図(1:1,000)



第3図 遺構平面図 (1 : 100)

写真 2  
調査前の状況



写真 3  
遺構検出作業風景



写真 4  
遺構完掘写真撮影前の  
作業風景



写真 5  
溝Ⓐ断面土層

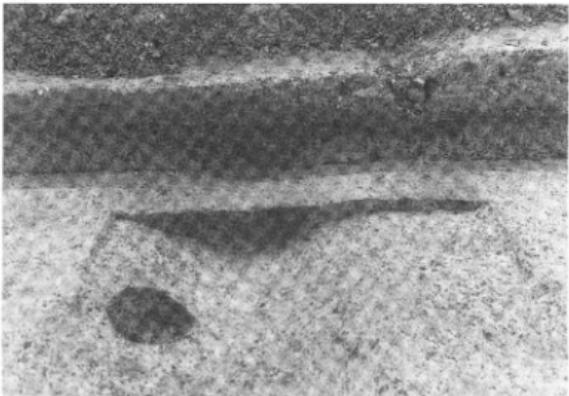


写真 6  
遺構完掘状態(北から)

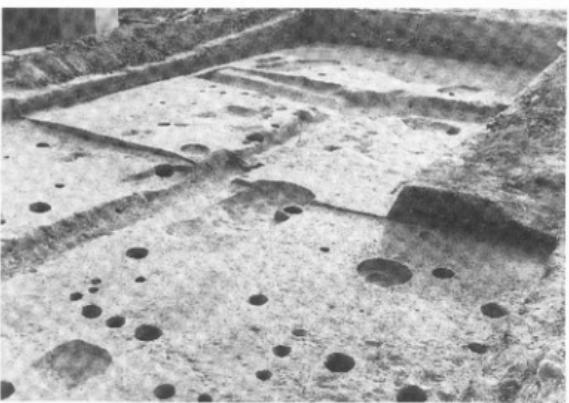
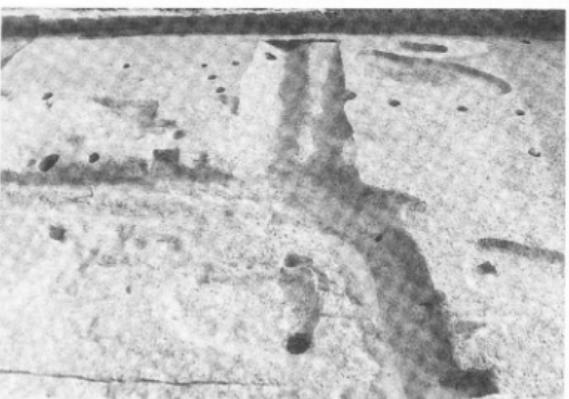


写真 7  
遺構完掘状態(北東から)



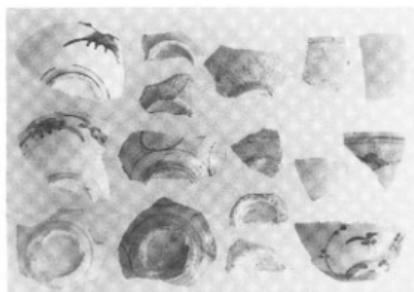


写真8

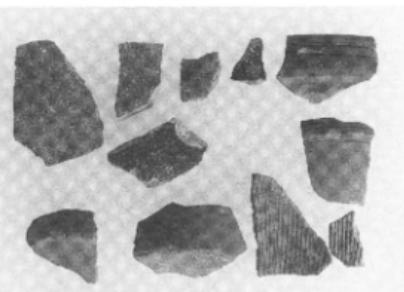


写真9

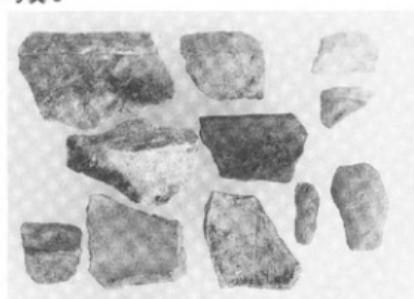


写真10



写真11



写真12



写真13



写真14

写真8～11 暗褐色土出土遺物

写真12 土坑④出土遺物

写真13 ピット⑥出土遺物

写真14 経塚古墳西田中採集滑石製紡錘車

香川県埋蔵文化財調査概報集  
三 反 地 遺 跡  
西 又 遺 跡  
堂 之 岡 遺 跡

1990年3月31日

編集 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 (株)多田印刷所